

認知症診療に従事して

札幌市医師会
札幌ライラック病院

やまぐち いさお
山口 勇雄

認知症外来を初めて受診される患者様には特に補聴器を使用している方については、補聴器を装用のうえでの、また「お薬手帳」を持参のうえでの受診をお願いしている。診察してみると認知症の発症というよりも難聴の増悪の症例が非常に多い。補聴器が合わなかったり、患者様が補聴器を使用したがない症例も非常に多い。難聴の方は実際は聞こえていなくても、ただ聞く場合が多く、周りの人たちは患者様は理解していると思っている場合も多い。認知症診療に関し考えておかなければいけないのは高次脳機能の正確な評価である。高次脳機能の検査として神経心理学的検査にはさまざまなものがあるが認知症診療ではスクリーニング検査として長谷川式認知症スケール（以下HDS-Rと略す）とMMSE（Mini Mental State Examination）が特に重要である。日本ではHDS-Rが主流であるが、世界ではMMSEが標準のテストとして普及している。HDS-Rは口頭での質問事項で検査ができ、アルツハイマー型認知症を診断するのに適し、MMSEは「口頭指示」「書字」「図形模写」といった言語機能や空間認知機能を必要とする項目があり、これらの認知機能の低下は血管性認知症に表れやすく、MMSEの点数が低い場合は脳血管性認知症を考えなければならぬとされている。MMSEの点数には年齢と教育年数によっても変化する。80歳以上の高齢者に実施する際にはそれらの影響を考慮する必要がある。これらの意味で結果の判断にはさまざまなものが影響する。HDS-Rを行っていると、いろいろなことを考えさせられる。HDS-Rで年齢を問うと、これには答えず自分の生年月日を答える患者様がいる。残念ながら、こういった場合は不正解となる。問診の際は、コロナ禍でマスクをして問診を行うわけだが、マスクのため、どうしても声がくぐもるので、特に難聴のある患者様では、大声で問診をすることになり、さながら口喧嘩をしているような感じとなる。計算、数字の逆唱の問題では理数系や算盤の素養がある患者様だと、早く正確にお答えになる。昔取った杵柄というわけで、評価が少し変わってくる。野菜の名前：言語の流暢性を見る検査では、例えば同じ3種類位の野菜の名前（ホウレンソウ・ダイコン・ニンジン等）のセットを何回か繰り返しお答えになる患者様がいらっしやる。こういった場合、それはもうおっしゃいましたと訂正せず、そのまま回答記録に書いて、後で同じものは減点する。認知症検査は職歴、その時の患者様の体調、精神状態、既往歴、不眠などで結果が変わってくるので注意を要する。また認知症の中には、初期のレビー小体型認知症とか前頭側頭型認知症では結果が割合に高得点のことがあり注意を要する。

僕が脳外科医になったわけ

函館市医師会
函館脳神経外科病院

しまぎき みつりのり
嶋崎 光哲

僕は昭和29年に十勝の芽室町字上美生という、日高山脈の麓にある人口1,000人位の田舎で生まれました。芽室町は農業（主に畑作で豆・ジャガイモ・てん菜など）が盛んで、父親は農機具を作ったり修理する鉄工所を営んでいました。小学校に入ると図体が大きくやんちゃで勉強もせず、友達と遊ぶために毎日学校に行っているという調子でしたが、小学3年の時に校長先生から背が大きいから柔道をやったらどうかと勧められ、学校で柔道を始めました。小学5年の時に熱血指導の赤シャツ先生が赴任し、放課後に柔道、陸上、スケート、算盤などいろんなことを教えてもらい、また休日には大会に連れて行ってもらいました。中でも柔道は十勝の少年大会で優勝するまでになりました。これが後に大きな自信となり、勉強もするようになりました（赤シャツ先生には感謝です）。高校は家業を継ぐために釧路高専の機械科に入学しました。その当時釧路高専の柔道部は強く5年間練習に明け暮れる毎日でした。卒業時に何か人の役に立つ仕事がしたいと考え医者を目指すことにしました。大学受験の右も左もわからない僕に予備校で偶然出会ったOさんが受験勉強のやり方を教えてくれました。その後無事札幌医大に入学することができました（Oさんのおかげです）。大学に入ったら柔道以外の別なスポーツをやってみたいと考えていましたが、またしても柔道部に入部してしまいました。しかし大学の柔道部は楽しく、柔道を通じてたくさんの良き先輩・同級生・後輩に出会うことができました。また札幌医大が東医体で優勝することもできました。6年生の時にどこの医局に入ろうかと迷っていた時に先に他大学を卒業しH大の脳外科の医局に入っていたOさんに相談した所、「仕事が忙しく、家庭を不幸にするから脳外科だけはやめた方がいいよ」と親切にも忠告を受けました。学生時代から神経学に興味があり、柔道部の先輩である中村記念病院の前理事長・中村順一先生が今度神経内科を開設するから来ないかと誘っていただき、結局中村記念病院に入ることになりました。まずは救急が診れないと当直も困るだろうとのことで、最初脳外科を勉強することになりました。患者さんを助けるために日夜奮闘する先輩達の姿を見て、また脳外科の先生方が外見は髭を生やしたり強面なのに、患者さんに対しては非常に優しく接している姿を見て脳外科の世界に引き込まれました。というわけでいろいろな人のおかげで脳外科医になりました。卒業後38年経った現在も函館で脳外科医として年を重ねています。